1970.7.16 明治大学新聞

沈潜する〝反大学〟運動

六月闘争が終わり、今学園は前期試験の時期を迎え、それが終われば長い夏休みが待っている。街頭へ繰り出した諸党派は政治集会の季節と、こぞって政治集会を開催している。そうした中で学園は二部において「ロックアウト粉砕・学館解放」闘争、各学部学生大会開催について、連日のように闘争は展開され、寮闘争はガス、水道、電話などをとめられた中で、生活をかけた闘いを強いられている。生田では全学評を中心として運動を定着させてきている。だが和泉は六月闘争を終え、運動は沈滞ムードが漂よい、二部のサークルは学館のロックアウトによって活動の場を締め出され、苦境に立たされている。

現象的にみれば「夏枯れの季節」なのかも知れない。

●だが、運動は死んではいなかった。穴倉のようなサークル室で、狭苦しいサークル室の中で、「地味でも自立した運動を作っていこうとする者たちが、根づよく存在し続けていた。」

自主ゼミの構築から

明大闘争は風化したが 60年代の総括をふまえ

新しき〝闘い〟へ向け出発

■自主ゼミの出発□

土曜日の午下がり、和泉キャンパスは、タテカンが撫然と立っているだけで、人影はまばら。

駿河台の学生会館とは対照的に和泉の学生会館は窓は開け放たれ開放的な空気にあふれていた。だが、人影は少なく、声もなくひっそりとした外観を呈していた。それでも部屋に一歩踏み込むと、五人、六人と集まり印刷する者、がりを切る者、学習会をする者、雑談をする者。

細長い部屋にテーブルを囲んで五、六人が座っていた。自主ゼミ実行委員会のメンバー。壁に貼られた紙には「反大学」の文字があちこちに見える。彼ら自主ゼミ実行委は「反大学」運動を追求し、六・一四に旗上げした。

自主ゼミ実行委なるもののそもそもの発端は、昨年の明大闘争を担う、経営学部の闘争組織であった経営学部闘争委員会である。

明大闘争という大前提の下に、早急に組織された営闘委は、必然的に消滅していった。そうした中で、彼らは経営学部自主ゼミ実行委員会として再び結集してきた。

彼らが再び結集した事情をIM君は「なんかしなくちゃいけないというジンマレがあったし、それにプロゼミが民青に乗取られてきて、それを大学当局が、中執は認めず今認めるのはプロゼミ協（現在三年）だと言うことに反発し、反民青というところで集まってきた」と語った。

そうした経過で、営闘委の総括などをする中から、「自己の原点における戦いとして、加害者意識の認識をもっての闘争参加を行ないうる最も有効な組織とは、自主ゼミ運動を行ない得る組織」（自主ゼミ報告より）として誕生した。誕生以来、一月二十六日の法学部の福井正雄助教授による第一回自主ゼミを始めとしてこれまで十数回の自主ゼミを行なってきた。

こうした自主ゼミは「まず再度われわれが、明大闘争とは何かを問うことから始めねばならなかった」とのもとに第一回の福井助教授とのティーチインは「明大闘争と私」というタイトルで明大闘争をめぐって討論がかわされ、二回目は「大衆と前衛」、三回目は生田の助手共闘による「評議会運動と明治大学闘争」と順調に運んだ自主ゼミも、決していつも、成功を収めてきたわけではなかった。ある時には数名しか参加しない時もあった。そうした行き詰まりにぶつかりながらも、反大学センター討論会に加わり、外との連帯をはかりながら、混迷しながらも個人の問題意識を徹底的に追求し、深化させて行くことによって打開し、止揚させていった。

彼らのこうした自主ゼミ運動は当然ながら単なる勉強会ではなかったし、自主講座で研究すること自体が、自己目的化されたものとしてあったのではなかった。彼らは六〇年代初期に生まれたこれまでの自主講座、自主ゼミなどの運動を次のように総括している。

■60年代の総括□

「中大の自主講座は闘争中という特殊な空間にしか存在し得なかったあの爆発的な大衆の怒りを持続的な反体制エネルギーへと昇華させ、組織化し社会的な反体制運動との有機的結合を計るための精神的な根拠地としてあった。

従来の自主ゼミ、自主カリがせいぜい党派やサークルの勉強会程度の運動だったのに対し、中大の自主講座は自主学習活動を本格的な運動として高めることに成功した。自分達が選んだ講師の講義を聞く自主カリキュラム方式であり、対抗講座的意味あいをも含んだこの運動は、既存の学問を自主管理して行く点では画期的であった。

しかし学問をあまり大切に管理しすぎたのか、自己の管理する学問の中身を問うことなく知るための活動に終始したあまり、自主講座で研究すること自体が自己目的化してしまい、結局左から大学の授業の不足部分を補なうような形の、大学権力に対する闘いを欠落させた学生会館が主催する一種のアトラクションと化してしまった。自己の学ぶ学問は無条件に正当化され、学問やそれを担う主体のあり方を自己否定的に問うことのない運動であった。

明大学費闘争における自主講座は、当時としては最も進んだ質を持ち、バリケードの中で既存の学問体系を否定し、新たな学問体系創造をめざしていた。しかし持続性を持ち得なかった。

六〇年代の自主講座運動に言えることは、総じて既成の学問を批判する中から新たな学問体系を創造していく様な能動的、攻撃的な運動ではなく、一般学生をバリケードにつなぎとめる手段として、左翼有名人の講演会を開く様な形での文化的な、衝動性を持たない受身的、防禦的なものであった。そしてそこからは講演者－聴衆という従来の一方的なコミュニケーション関係は固定化されたままで、それを変えて行こうなどという姿勢は生まれてこないのは当然であった。さらに閉鎖的な集団内での運動であり、特に大学という枠内でのものでしかなかった。開放性を持たない権力から解放された特殊な人間の知的サロンであり、その空間が消滅するや否や消えてしまう短期的なものだった」（前出同報告）

そうした自主講座運動の限界性をこえるものはなんであったのか。それは東大・日大闘争によって創出された「反大学運動」であった。「中大の自主講座運動の限界性は、学内二重権力－大学権力打倒－大学解体という具体的な闘いを目ざすまでにいたらなかったところにある。日大の反大学は中大の自主講座運動の限界性を乗り越え、現実に日本大学を解体していくものとしてあった。緊張感と攻撃性を持っていたバリケードも日がたつにつれ日常化し、バリケードを所有しているという小所有者意識が芽を出すという傾向に対して、バリケードの保守化を防ぎ攻撃性を回復させるものとして、当初この運動は構想された。

さらに構想化を進め、バリケード封鎖による建物の管理をさらに教育研究への管理へと推し進める過程で、ブルジョア学問批判により新たな学問体系化をはかるという側面と、闘争を闘い抜く主体のイデオロギー構築の場という二面性を持ちながら大学解体を実現してゆくものとして反大学が位置づけられた。

京大の反大学は、東大の自己否定・帝大解体の思想、日大の反大学構想の質を継承する中にあった。京大反大学の特色は①とかく防衛的になりがちなバリケードを攻撃的な性格に変えようとする。そのために開放性を持つものとして高校生、労働者に積極的に窓口を拡げていった②過去の自主講座運動の克服をねらい、継承性を持ち、新たな学問創造をめざすものとしてあった③「理論と実践の統一」「労学提携」を提唱した。

反大学運動の質的転換としての京大のパルチザン運動がますます組織的に強化し、高度管理支配を強いる国家権力との今後の闘争形態を具体的に形づくった点において意味があるが、しかし京大内のみの緊張関係でしかなかったために京都全市を反権力闘争の場とし得なかった。」（前出同報告）

こうした総括から出発した自主ゼミは初めから必然的に「反大学」を志向するものであった。自主ゼミ実行委はもともと組織化されたものではなく、したがって組織の理念はない。組織からの拘束ではなく、個々人の主体としての問題であり、主体化した個々人が闘うときに闘う。個人の問題意識を大切にし、自発的に依拠しているのである。

■他との連帯の中で□

「反大学」、彼らの反大学運動はこれまでの学園闘争において語られてきた理念を継承する中において、自らの問題としても抜きがたく存在したのであった。

「経営学部はさきに創設以来、資本の要請にそって彼の忠実な下僕を作りあげてきた。現在の経営学とは経営者が企業活動が暗礁に乗りあげた時の舵とり術であり資本家が自己の論理をいかに有効に貫徹させるかと言った技術学、経験学であり、本質的に反人民的な体系である——合理化という名で歪められてきた技術とは本来どうあるべきなのか－科学技術とは本来どうあるべきなのか－科学技術の真理性を追究して行くことにより、非科学的な経営学部の存在の矛盾を暴露して行く。

さらに、現場における技術の姿を把み、今までまったく知り得なかった労働対象－対象自然を少しでもわれわれが認識し、原初的な労働人としての人間の姿を回復して行く運動として革命運動をとらえて行く。観念的で現実的基盤を持たない理論信仰を排し、実感の伴った運動として闘って行くために技術革新－合理化の嵐の中から生まれる公害をわれわれの問題としてとらえ、闘い抜く。そして実感を持ったものとして労働の現場へ出かける。

まさにこのような闘いこそプロレタリアートの意識にわれわれが接近して行く、リアリティを持った運動であり、学生としての自己のプチブル性は、この闘いを展開して行く中で自己否定運動として止揚されて行くのではないか」

こうした問題は決して経営学部だけの問題としてあったのではなく、大学総体にいえることであった。学部制があること自体も問題があり「学部制をとっぱらったところに反大学」があると語る。

経営学部による自主ゼミ、反大学運動は、彼ら経営学部だけにとどまらず、法学部などの学生にも拡がっていった。さらに、彼らと同じく反大学を志している史地共闘、学館運営委員会、社研などとも連帯していこうとしている。しかし、同じ「反大学」を唱えながらも、それぞれに相違があり、まだ実質的には進行していない。今後自主ゼミは発展的に解消し、反大学運動を広くノンセクトを中心に呼びかけていくという。

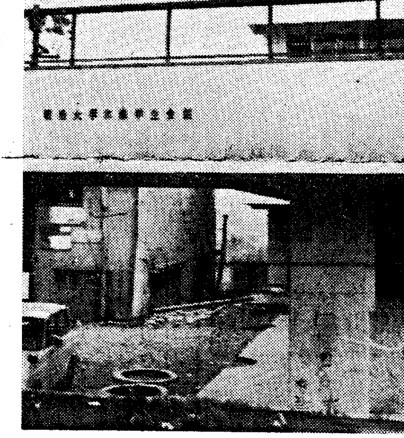
■反大学連合の創出□

反大学運動は個別大学問題にかぎらず、生田における全学評運動にみられるような、地域運動としてもやっていこうとしている。その一つとして、公害問題があげられ、それは経営学の一環である。

具体的には現在「水俣病を告発する会」に参加している。そして今後は大原交差点における鉛害も取りあげたいといっていた。大学運動は大学内にとどまらず、地域、地区との連帯を求めた運動となってきている。

彼らの運動はハッキリとノンセクト運動として位置づけられている。彼らが何故にノンセクト運動として位置づけるのか「日大・東大闘争の高揚の中から自己をノンセクトラジカルとして意識し、自立した運動を展開する部分の登場により、以前はポツダム自治会を基盤とした政治諸党派に領導されていた全学連運動は、主役の座をのぞき、新たな全共闘運動がノンセクトを中心に動き始めた。党派の運動は、大状況（政治状況）から規定された被害者意識的運動であった。これに対しノンセクトラジカルと言われる部分は、小状況（生活空間）からの自己の加害者性を認識する中から一段階認識の次元の高い闘いを展開した」（前出同書）というゆえからであろう。「政治革命を目的意識的に追及するのではなく、社会革命の一端としてある」と語る革命観にもうかがえる。小状況から立ちあがって、自然に対権力闘争へ行くのではないかというのが彼らの根底的な考えである「マルクス主義にのっとってというんじゃなくて、語ってみたらマルクス主義だったということだと思うんですよ」といった彼は、まさに、人間として闘っているという感じを受けた。

彼らの反大学運動は、反大学センターと連絡を取りながら、全都の反大学連合を創出し、さらには一月頃には、都立大、芝工大、法政、早稲田、明大全学評を中心として、全国の反大学連合を創出していこうとしている。それによって、これまで「行き場」のなかったノンセクトも「行き場」ができてくるのではないかとみている。

明治において、昨年に始まった明大闘争は風化した状況にあるが、壊滅することなく生き続けている。こうした沈潜するジミな運動は、これから起こるであろう、処分問題、学費値上げ問題を契機として、上昇してくるであろうことを予感させた。